

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	明代金瓶梅資料訳注稿（その二）
Author(s)	川島, 優子
Citation	中國中世文學研究 , 72 : 48 - 59
Issue Date	2019-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047688
Right	
Relation	



明代金瓶梅資料訳注稿（その二）

川島優子

はじめに

前稿「明代金瓶梅資料訳注稿（その一）」（『中国中世文学研究』第七一号、二〇一八）に続き、『金瓶梅』に関する明末清初の資料について訳注を施す。本訳注は黄霖編『金瓶梅資料彙編』（中華書局、一九八七）を底本とし、卷三に収められる明、清、近代諸家の文集、筆記、書簡中における『金瓶梅』に関する雑記や雑評のうち、明末清初諸家の記述である①袁宏道「董思白」、②袁宏道「觴政」、③袁宏道「与謝在杭」、④袁中道「游居柿録」、⑤李日華「味水軒日記」、⑥沈德符「万曆野獲編」、⑦屠本峻「山林經濟籍」、⑧張岱「陶庵夢憶」、⑨尺蠖齋「東西兩晉演義序」、⑩張無咎「批評北宋三遂平妖伝叙」、⑪笑花主人「今古奇觀序」、⑫崢霄主人「魏忠賢小説斥奸書凡例」、⑬薛岡「天爵堂筆余」、⑭聽石居士「幽怪詩譚小引」、⑮夏履先「禪真逸史凡例」、⑯煙霞外史「韓湘子十二渡韓昌黎全伝叙」、⑰李漁「三國志演義序」、⑱宋起鳳「王弼洲著作」を取り上げる。前稿では①～⑥についての訳注を掲載した。本稿では続く⑦～⑱についての訳注を掲載

する。字体は常用字に改め、⑨、⑩、⑪については便宜上分割した。尚、影印本等を参照の上、字句や句読を改める必要がある場合は注記した。

⑦屠本峻「山林經濟籍」

屠本峻曰、不審古今名飲者曾見石公所稱「逸典」否。按『金瓶梅』流伝海内甚少、書帙与『水滸伝』相埒。相伝嘉靖時、有人為陸都督炳誣奏、朝廷籍其家。其人沈寃、託之『金瓶梅』。王大司寇鳳洲先生家藏全書、今已失散。往年予過金壇、王太史宇泰出此、云以重貲購抄本二帙。予読之、語句宛似羅貫中筆。復從王徵君百穀家又見抄本二帙、恨不得賭其全。如石公而存是書、不為托之空言也。否則、石公未免保面龜腸。（明末刻本『山林經濟籍』、転引自阿英『小説閑談』）

〔語注〕

○屠本峻 一五四二～一六二二。字は田叔、号は由叟。浙江鄞県（現在の浙江省寧波市）の人。父は太常寺典簿、礼部郎中、兩淮運司同知を務め、後に福建に移り塩運司同知を務めた人物。『閩中海錯疏』や『離騷草木疏補』な

どの著作がある。○山林經濟籍 隱遁生活の心得ともいふべき事項について書かれた書物。「山」「林」「経」「済」「籍」の五部で構成され、二十四卷。該当部分は経部卷八「燕史固書第十二」に見られる。ここでは袁宏道の「觴政」（前稿参照）の記事が引かれ、屠本峻の見解が述べられている。○石公所稱「逸典」 袁宏道の「觴政」を踏まえる（前項参照）。石公は袁宏道の号。○書帙 書物の形状や巻数などの外観を指すか。○陸都督炳 陸炳については前稿『万曆野獲編』の注を参照されたい。王世貞は刑部主事であった頃に、陸炳の家に匿われていた闇という罪人を引っ捕らえ、嚴嵩を介した解放の要請にも応じなかったという（『明史』卷二八七）。○王大司寇鳳洲 王世貞、一五二六～一五九〇。字は元美、号は鳳州、弇州山人。太倉（現在の江蘇省蘇州市）の出身。嘉靖二十六年の進士で古文辞派の代表的人物（後七子のひとり）。『明史』卷二八七に伝がある。「大司寇」は刑部尚書のこと。父の王忬が時の権力者嚴嵩によって獄死させられたことから、『金瓶梅』は王世貞が父の恨みを晴らすため、頁の端に毒薬を塗って嚴世蕃（嚴嵩の息子）に献上したものだという説もある。王世貞と嚴嵩父子については、大木康「嚴嵩父子とその周辺―王世貞、『金瓶梅』その他―」（『東洋史研究』五五、一九九七）等に詳しい。○王太史宇泰 王肯堂、一五五二？～一六三八。字は宇泰、号は損庵。金壇（現在の江蘇省常州市）の人。万曆十七年の進士で、同年に翰林院檢討に任ぜられる。医学に通

じ、『証治準繩』、『医論』等を著した。「太史」は翰林のこと。○王徵君百穀 王稚登、一五三五～一六一二。字は百谷、百穀。もと江陰（現在の江蘇省無錫市）の人。後に蘇州に遷る。布衣ながら万曆年間には修国史を務め、詩人、書家としても知られる。王世貞や屠隆らと親交がある。『明史』卷一八八に伝がある。○保面龜腸 袁宏道「觴政」に飲徒が読むべき典籍が挙げられて「不熟此典者、保面龜腸、非飲徒也」とある（前項参照）。ここで屠本峻は、『金瓶梅』が天下にほとんど出回っていない現状を述べた上で、袁宏道の言説を引いて「非現実的だ」と批判しているものと思われる。

〔訳〕

屠本峻曰く、古今の酒飲みで、石公の褒め称える「逸典」を見たことがある人がいるのだろうか。按ずるに、『金瓶梅』は海内に流通することが非常に少なく、巻数や体裁は『水滸伝』に等しい。伝えられるところによれば、嘉靖の頃、ある人が都督の陸炳に誣告され、朝廷に家財を没収された。その人は晴らしようのない冤罪を被り、これを『金瓶梅』に託したのだという。大司寇の王鳳洲先生の家に全巻揃っていたが、今はもう散逸してしまった。かつて私が金壇に立ち寄った際、太史の王宇泰がこれ（『金瓶梅』）を出してきて、高値で抄本二帙を買い取ったという。読んでみると、その文章はあたかも羅貫中の筆のようであった。また徵君王百穀の家でも抄本二帙を見たが、残念なことに完本ではなかった。石公の

ようにこの書を持っていれば、空言を吐くことにはならないが、そうでなければ、石公は「保面甕腸」（口ばかりで中身がない人間）だということになる。

⑧張岱「陶庵夢憶」

甲戌十月、携楚生往不繫園看紅葉、至定香橋、客不期而至者八人。南京曾波臣、東陽趙純卿、金壇彭天錫、諸暨陳章侯、杭州楊与民、陸九、羅三、女伶陳素芝。余留飲。章侯携縑素為純卿画古仏、波臣為純卿写照、楊与民彈三弦子、羅三唱曲、陸九吹簫。与民復出寸許界尺、拋小梧、用北調說『金瓶梅』一劇、使人絶倒。○九八二年上海古籍出版社本『陶庵夢憶』卷四「不繫園」

【語注】

○張岱 一五九七〜一六八九？字は宗子、石公、号は陶庵。山陰（現在の浙江省紹興市）の人。名門の出身でありながら仕官せずに悠々自適な生活を送り、明滅亡後は山に入って貧窮の中で著作に没頭した。○陶庵夢憶 かつての明末江南の日々を記したもの。八巻。松枝茂夫訳『陶庵夢憶』（岩波書店、一九八一）の「まえがき」によれば、「張岱の数多い著作の中でも最も有名なもので、ほとんど彼のすべての文章の中からその最も得意とするものを選びすぐって一書を成した観がある」という。○楚生 調腔（明末清初に紹興一帯で流行していた芝居の一種）の女役者。『陶庵夢憶』巻五「朱楚生」によれば、科

がある。清・李綠園の『岐路灯』第十回に、西遊記の劇を見た観客が、猪八戒役のおかしな見た目やがさつで間抜けな話しぶりに大笑いする（令人絶倒）場面があることなどから、ここでも、北方なまりで『金瓶梅』が説唱され、皆で笑い転げた、と解釈しうる。尚、下文では、夜になって彭天錫、羅三、与民が本腔戯（崑曲）を演じ、楚正と素芝が調腔戯を演じ、いずれも「妙絶」であったとある。こうしたことから、『金瓶梅』一劇はあくまで酒の席での余興であったと考えられよう。

【訳】

甲戌（崇禎七年）十月、朱楚生を連れて不繫園に紅葉を見に行つた。定香橋に至ると、期せずして来合わせた者が八人いた。南京の曾波臣、東陽（現在の浙江省金華市）の趙純卿、金壇（現在の江蘇省常州市）の彭天錫、諸暨（現在の浙江省紹興市）の陳章侯、杭州の楊与民、陸九、羅三、女伶の陳素芝である。私は皆を引き留めて飲んだ。章侯は白絹を持ってきていて純卿のために古仏を描き、波臣は純卿のために肖像画を書き、楊与民は三弦子を弾いて、羅三は曲を唱い、陸九は簫を吹いた。与民はまた一寸ほどの界尺を取り出し、梧桐の小机に寄りかかって北調で『金瓶梅』の一劇を語り、そこにいる人

⑨尺蠖齋「東西兩晋演義序」（1）

白の妙は右に出るものがないほどで、絶世の美女も敵わぬ魅力を備えていたという。芝居に命をかけ、最後は情のために死んだ。○不繫園 西湖の湖畔に作られた明末の豪商汪汝謙（一五七七〜一六五五）の画舫。汪汝謙『不繫園集』『不繫園記』には、「自有西湖、即有画舫。……偶得木蘭一本斬而為舟、四越月乃成計長六丈二尺、広五之一。……陳眉公先生題曰不繫園佳名。」とある。

○定香橋 蘇堤の南端、西湖十景のひとつ「花港觀魚」のあたりにかかる橋。○南市曾波臣 曾鯨、一五六〇〜一六四七。字は波臣、莆田（現在の福建省莆田市）の人。明末の画家。南京に滞在し、董其昌、陳繼儒らの肖像を描いたことでも知られる。○東陽趙純卿 未詳。○諸暨陳章侯 陳洪綬、一五九八〜一六五二。字は章侯、号は老蓮。明末の画家。『陶庵夢憶』では巻三「白洋潮」「陳章侯」に登場する。松枝氏（前掲）の注によれば、「幼い時から張岱の二叔張爾葆（これも画家として知られていた）の門に学び、その女婿となった」という。○杭州楊与民、陸九、羅三、女伶陳素芝 未詳。○縑素 書面を書くための白い絹。○界尺 木製の定規状のもの。ここでは「鼓板」「拍板」のような打楽器（あるいはその代用品）を指すか。○北調 北方系の音調。南曲が五音階なのに対し、北曲は七音階。ここでは「界尺」を用い、また「用北調説」とあることから、あるいは北方のなまりを交えて説唱（歌と語りを交える芸能の一種）を行ったか。○絶倒 抱腹絶倒するの意と、非常に感心するの意

一代肇興、必有一代之史、而有信史有野史。好事者聚取而演之、以通俗論人、名曰演義。蓋自羅貫中『水滸伝』、『三国伝』始也。羅氏生不逢時、才郁而不得展、始作『水滸伝』、以抒其不平之鳴。其間描写人情世態、宦況閨思種種、度越人表。迨其子孫三世皆啞、人以為口業之報。而後之作『金瓶梅』、『痴婆子』等伝者、天且未嘗報之、何羅氏之不幸至此極也。良亦尼父惡作俑意耳。

【語注】

○尺蠖齋 底本では序の作者として尺蠖齋の名が挙げられるが、『古本小説集成』（上海古籍出版社）所収の影印本（北京図書館蔵本を底本とし、中国芸術研究院戲曲所傳惜華原蔵本を一部使用）では、末尾に「雉衡山人題」とある。また、巻首には第二行に「武林 夷白主人 重訂」、第三行に「武林 泰和堂主人 參訂」とある。雉衡山人は楊爾曾の号。楊爾曾は万曆頃の人で、字は聖魯、別号は夷白主人、浙江錢塘（現在の浙江省杭州市）の人。他にも『韓湘子全伝』などの通俗小説の編纂刊行に携わる。序は重訂者である夷白主人⇨楊爾曾⇨雉衡山人によって書かれたものと考えるのが妥当であろう。また、『東西兩晋志伝』も同じく雉衡山人の序文を有し、巻首第二行に「秣陵 陳氏尺蠖齋 評釈」、第三行に「繡谷 周氏大業堂 校梓」とある（筆者未見。先行研究による）。底本が基づいたとする「乾隆間周氏文光（遠）堂刊陳氏尺蠖齋『東西兩晋演義』巻首」は後者か（いずれにせよ、序は雉衡山人によるものと考えられる）。尚、尺蠖齋につい

ては、世徳堂本『西遊記』の序文を書いた「秣陵陳元之」と同一人物と考えられており、上原究一「百回本『西遊記』の成立と展開―書坊間の関係を視野に―」（東京大学人文社会系研究科二〇一六年度博士論文、東京大学学術機関リポジトリ）では、「小説・戯曲の校注者として金陵唐氏世徳堂お抱えの人物であったと考えて良かるう」という（現存する文業堂本は、世徳堂原刊本を、文業堂が補修重印したもの）。○**東西両晋演義** 明代の歴史小説。西晋、東晋の歴史が語られたもの。十二巻五十回。尚、上述の『東西両晋志伝』は、基本的な内容は同じながらも、西晋四巻百十六則、東晋八巻二百三十一則からなる分則本。○**迨其子孫三世皆啞** 羅貫中の子孫が三代に亘って啞者になったという記述は、明・田汝成『西湖遊覧志余』巻二十五「錢塘羅貫中本者、南宋時人、編撰小説數十種、而『水滸伝』叙宋江等事姦盜脫騙機械甚詳。然變詐百端、壞人心術、其子孫三代皆啞。天道好還之報如此。」や、清・李綠園『岐路灯』第九十回「『水滸伝』、倡乱之書也、叛逆賊民、加上『替天行道』四箇字、把一起市曹梟示之強賊、叫愚民都看成英雄豪杰、這貽禍便大了。所以作者之裔、三世皆啞、君子猶以為孽報未極。」などにも見られる。○**尼父悪作俑** 孔子は最初に「俑」（死者と共に埋葬される木製の人形。後に殉死の習慣を生み出した）を作った人物を憎み、その子孫が絶えることを予期した（『孟子』梁惠王章句上）。「作俑」は悪い先例のたとえとして用いられる。

夜不休。迨醉眠、鷄鼓翼再鳴矣。

（上）底本は「挾」に作る。『古本小説集成』所収の影印本に従って「挟」に改める。

【語注】

○**太和堂主人** 『古本小説集成』所収の影印本は「泰和堂主人」に作る。『東西両晋演義』の参訂者（前述）。詳細不明。○**二酉** 現在の湖南省沅陵県の西北にある大酉と小酉の二山。洞穴に大量の古書が隠されていたことから（『太平御覧』巻四九引『荊州記』）、蔵書の多いことをたとえる。○**五車** 蔵書の多いこと（『莊子』天下）。『古今小説』巻四に「陳太尉愛惜真如掌上之珠、用自己姓、取名陳宋阮、請簡先生教他讀書。到一十六歳、果然学富五車、書通二酉。」とあるように、多く書を読み博学なことをたとえる。○**射雕** 弓を射る才能がある。ここでは文才のあることをたとえるか。明・楊慎『升庵詩話』巻一三「錢珣詠史」に「詩皆用書中語、括書詠史如此、射雕手也。」とある。○**倚馬** 馬に寄る。晋の袁虎が馬に寄りかかって長文を書いた故事（『世説新語』文学篇）から、文才のあることをたとえる。○**施予然諾** 物を受け渡すことと事を承諾すること。他者に金品を施し、一旦承諾したことは実行することから、男気があることをいうか。『史記』巻一二四「遊俠列伝」に「而布衣之徒、設取予然諾、千里誦義、為死不顧世、此亦有所長、非苟而已也。」とある。○**白墮** 酒造りの名人の名。後に上等酒を指す。

【訳】

【訳】
一つの王朝が興ると、必ず歴史書が生まれる。信史もあれば野史もある。物好きたちはそうしたものを集めて敷衍し、わかりやすくして人々に示す。これを「演義」という。おそらく羅貫中の『水滸伝』『三国伝』より始まったものだろう。羅氏は時運に恵まれず、才能豊かであったもののそれを發揮することができずに、『水滸伝』を作るに及んでその不平の声を挙げた。そこには人の情や世のありさま、役人たちの様子や深窓の思いといったものが描き出されており、凡人になしえるものではなかった。その子孫は三代にわたって啞者となり、人々はそれを口業の報いだとした。しかし後に『金瓶梅』『痴婆子』などを作った世に広めた者については、天はいまだ罰を与えていないというのに、どうして羅氏の不幸はこれほどまでに至ったのだろうか。実に、「尼父 俑を作るを悪む（孔子は悪習の発端を作った人を恨んだ）」ということである。

◎尺蠖齋「東西両晋演義序」(2)

今年仲夏、溽暑蒸人、窪居甚苦、偶過太和堂主人。主人者、貂蟬世胄、紈綺名家、秘窺二酉之藏、業擅五車之富、射雕猷技、倚馬呈奇、而尚義任俠^①。施予然諾、淄澠不爽、時以醇醪澆其胸中塊磊之氣。故其座常滿、其尊不空、誠翩翩佳公子也。是日以白墮遲我、觥籌交錯、丙

今年の仲夏はうだるように蒸し暑く、窪地での暮らしは実に苦しかったが、そんなときにたまたま太和堂主人のところ立ち寄った。この主人というのは、高官の家柄で、富貴な家の子弟、蔵書は二酉山に隠された古書ほど多く、読み得た書物は五車を満たすほど豊富で、弓を射れば一流の技を披露し（筆を執るやその才能を見せつけ）、馬に寄りかかってたちどころに奇才を發揮し（またたく間にその優れた文才を發揮する）、しかも義理を尊ぶ男伊達。金銭の授受や事の承諾を重視し、善悪を間違えることなく、時に上等酒で胸中の積もり積もった気持ちをし洗い流す。そのため、いつも周りには人がいっぱい、酒樽が空になることはなく、まことにその名に違わぬ貴公子である。この日主人は上等酒で私を引き留め、真夜中になっても酒を酌み交わして楽しんだ。酔いつぶれて眠るころには、鷄が翼を振るって鳴いていた。

◎尺蠖齋「東西両晋演義序」(3)

主人謂我曰、「某欲刻『東西両晋伝』、而力有未逮、得君為我商訂庶乎有成。」余曰、「某非董狐也、子盍謀之外史氏乎。」主人曰、「昔弇州氏以高才碩抱、不得入史館秉史筆、故著述幾億方言、今君顛毛種種、仕路猶餘、寧不疾没世而名不称乎。且是編也、嚴華裔之防、尊君臣之分、標統系之正閏^②、声猾夏之罪愆、当与『三国演義』並伝。非若『水滸伝』之指摘朝綱、『金瓶梅』之借事含諷、『痴

婆子」之痴裏撒奸也。君何辞焉。」

(2) 底本は「標統系之正、聞声猶夏之罪愆」とする。句読を改める。

〔語注〕

○董狐 春秋晋の史官。晋の靈侯が趙穿に殺された際、正卿の趙盾は穿を罰しなかった。董狐は権勢を恐れることなく「趙盾弑其君」と記し、後、孔子に「古之良史」と称された(『春秋左氏伝』宣公二年)。○外史氏 野史を書く人。その自称としても用いられる。○弇州氏 王世貞(前述)のこと。○疾没世而名不称 君子は世を没するまでに名を残せないことをおそれる(『論語』衛霊公第十五)。

〔訳〕

主人が私に言った。「私は『東西両晋伝』を刊刻したいと思いつつ、いまだ力が及ばずにおります。手を貸していただければうまくいくのですが。」と。私が、「私は董狐(立派な史官)ではございません、どうしてこのような外史氏にご相談なさるのでしようか。」と言うと、主人は、「かつて、弇州氏(王世貞)は豊かな才能と強い志を有しておりましたが、史館に入って史筆を取ることが出来なかったため、幾億方言にも及ぶ著述をなしました。今、あなたはといいますが、頭が薄くなっているというのに仕官の道は遠い。まさか「世を没するに名の称せられざるを疾」まないでもおっしゃるのですか。しかもこれを編纂すれば、辺境の守りを堅くし、君臣の分を尊び、系統の正閏を示し、中華を乱す罪を述べあげること

になり、『三国志演義』と並び伝わることになるでしょう。『水滸伝』が朝廷の在り方を批判し、『金瓶梅』が男女の事によせて世を諷刺し、『痴婆子伝』が痴のうちに狡猾なとはわけが違うのです。どうしてお断りになることがありましようか。」と言う。

⑨ 尺蠖齋「東西両晋演義序」(4)

余爰是標題甲乙、稍加鉛槧、迨仲秋而殺青斯竟。間有姓氏之錯謬、歲月之參差、郡邑之變更、官爵之註誤、先後之倒置、章法之紊亂、皆非我意也、仍旧文而稍加潤色耳。知我者幸毋以鸞鳩³見哂。(乾隆間周氏文光(遠)堂刊陳氏尺蠖齋『東西両晋演義』卷首)

(3) 底本は「鸞鳩」に作る。『古本小説集成』所収の影印本に従って「鸞鳩」に改める。

〔語注〕

○鉛槧 鉛(鉛粉で文字を修正する筆)と木版(文字を書きつける板)。著作や校勘の意としても用いられる。○殺青 竹簡を作る際に竹を火であぶって乾燥させ、書きやすくしたこと。後に、定本を印刷すること。○鸞鳩 ハト科の小鳥。見識が浅くつまらない人物のたとえ(『莊子』逍遙遊)。

〔訳〕

私はそこで甲だ乙だと標題を記し、いささか手を加え、仲秋になって印刷が終わった。中には姓氏が誤っていた

り、年月が合わなかったり、群邑が変わっていたり、官爵が違っていたり、順序が逆になっていたりと、構成が乱れていたたりするところもあるが、いずれも私の意図するところではなく、元の文に拠っていささか潤色を加えただけだからである。我が理解者よ、どうか鸞鳩(浅はかな、小さな人間)だといって笑わないでいただきたい。

⑩ 張無咎「批評北宋三遂平妖伝叙」(1)

小説家以真為正、以幻為奇。然語有之、画鬼易、画人難。『西遊』、幻極矣。所以不逮『水滸』者、人鬼之分也。(4) 鬼而不人、第可資齒牙、不可動肝肺。『三國志』、人矣、描写亦工、所不足者幻耳。然勢不得幻、非才不能幻、其季孟之間乎。嘗辟諸傳奇、『水滸』、『西廂』也。『三國志』、『琵琶記』也。『西遊』、則近日『牡丹亭』之類矣。他如『玉嬌梨』、『金瓶梅』、另辟幽蹊、曲中奏雅、然一方之言、一家之政、可謂奇書、無当巨覽、其『水滸』之匪乎。(5)

(4) 「所以不逮『水滸』者、人鬼之分也。」の一文は底本には見られない。内閣文庫蔵「墨愍齋本」(国立公文書館デジタルアーカイブ)に拠って補う。

(5) 「天許齋本」はこの一文を「他如『玉嬌麗』、『金瓶梅』、如慧婢作夫人、只会記日用帳簿、全不曾字得処分家政、効『水滸』而窮者也。」に作る。

〔語注〕

○張無咎 詳細不明。黄霖氏の按語や魏子雲著『金瓶梅研究必読―明代金瓶梅史料詮釈』(貫雅文化事業有限公司、一九九二)等では、馮夢龍である可能性が指摘される。叙については、通称「天許齋本」と「墨愍齋本」で異なるがある。底本に基づいた「墨愍齋本」の叙は「楚黄張無咎述」とするが、「天許齋本」は「隴西張蒼無咎父題」とする。「楚黄」は現在の湖北省黄冈市。「隴西」は現在の甘肅省の東南部。太田辰夫訳『平妖伝』(中国古典文学大系三六、平凡社、一九六七)の解説に拠れば、「天許齋本は泰昌二年(一六二〇)に刊行されたものであるが、その後、版木が焼けたので新しく墨愍齋本が刊行された。後者は前者の序を改め、挿絵を減じたほか、基本的には異なるところが少ない。その刊行は崇禎七年(一六三四)以後である」という。また「二書に序を書いた張蒼(無咎)については知るところがないが、内容からみて馮夢龍の仮名ではありえない。また前者で「隴西張蒼」とするのに対し、後者で「楚黄張無咎」と改めた理由についても、詳(まづか)にしない。」とする。○批評北宋三遂平妖伝 北宋の仁宗慶暦七年に王則なる人物が妖術を使って乱を起し、六十六日で平定されたという史実に基づく物語。羅貫中の作とされる二十回本を馮夢龍が補作して四十回とした。○画鬼易、画人難 (誰も見たことがない)鬼を描くのは易しいが、(皆が目の当たりにしている)人間を描くのは難しい(『韓非子』外儲説左上)。○曲中奏雅

曲終奏雅に同じか。作品の最後の部分で素晴らしさが發揮される(『史記』卷一七「司馬相如列伝」)。「警世通言」叙にも「嗚呼、大人子虚、曲終奏雅、顧其旨何如耳。」とある。

〔訳〕

小説家は真を「正」とし、幻を「奇」とする。しかるにこのような言葉がある。「鬼を描くのは簡単だが、人を描くのは難しい」と。「西遊記」は極めて幻想的である。「水滸伝」に及ばない所以は、人を描いているか鬼を描いているかの違いにある。鬼を描いているのであつて人を描いていのではないために、歯牙を潤すことはできても、肝肺を動かすことはできない。「三国志」は人間的である。描写も巧みであり、足らないところは幻の部分だけである。とはいえ話の流れとして幻を描かなかつただけで、幻を描くことができなかつたわけではない。ちようど『西遊記』と『水滸伝』の中間くらいであらう。(これらの小説は)しばしば諸々の伝奇にたとえられてきた。「水滸伝」は『西廂記』、『三国志』は『琵琶記』、『西遊記』は近ごろの『牡丹亭』のたぐいである。ほかに『玉嬌梨』『金瓶梅』のようなものは、別に小道を開き、(途中はともかく)終わりは素晴らしいものであるが、一地方の話であり、一家庭の出来事であり、奇書ではあるが大著とはいえず、『水滸伝』の亜流といふところであらう。

ある。「浪史」(『浪史奇観』)、『野史』(『繡榻野史』)などは老いた私娼のようなもので、読めば吐き気がするし、様々な刻本の下位に位置する。王緜山先生はつねに羅貫中の『三遂平妖伝』を称えて、『水滸伝』に匹敵するものとした。……楚黄の張無咎、ここに記す。

⑩笑花主人「今古奇観序」(1)

至有宋孝皇以天下養太上、命侍從訪民間奇事、日進一回、謂之説話人。而通俗演義一種、乃始盛行。然事多鄙俚、加以忌諱、讀之嚼蠟、殊不足觀。元施、羅二公、大暢斯道、『水滸』、『三国』、奇奇正正、河漢無極。論者以二集配伯喈、『西廂』伝奇、号四大書、厥観偉矣。

〔語注〕

○笑花主人 序の末尾に「姑蘇笑花主人漫頭」とある。詳細不明。魏子雲氏(前述)は馮夢龍の仮名ではないかとする。○今古奇観 三言二拍から四十篇(『喻世明言』より八篇、『醒世恒言』より十一篇、『警世通言』より十篇、『拍案驚奇』より十篇、『二刻拍案驚奇』より三篇)を選んだ短編小説集。明末の抱邈老人なる人物の撰。○宋孝皇 南宋の第二代皇帝孝宗(在位一一六二〜一一八九)。「太上」は南宋の初代皇帝高宗(在位一一二七〜一一六二)のこと。○以天下養 天下の富を以て親を奉養する。最大の孝を尽くすこと。『孟子』万章章句上に「孝子之至、莫大乎尊親。尊親之至、莫大乎以天下養。為天

⑩張無咎「批評北宋三遂平妖伝叙」(2)

他如『七国』、『両漢』、『両唐宋』、如弋陽劣戯、一味鑼鼓了事、効『三国志』而卑者也。『西洋記』如王巷金家神説訖乞布施、効『西遊』而愚者也。至於『続三国志』、『封神演義』等如病人嚙語、一味胡談。『浪史』、『野史』等如老淫土娼、見之欲嘔、又出諸雜刻之下。王緜山先生每称羅貫中『三遂平妖伝』堪与『水滸』頡頏。……楚黄張無咎述。(明末四卷本『批評北宋三遂平妖伝』巻首)

〔語注〕

○弋陽 元末明初にかけて江西の弋陽一帯で興つた劇。○王巷金家神 王の通りや金の家の守り神。どこにでもいるような神の意か。未詳。○王緜山 王衡、一五六四〜一六〇七。字は辰玉、号は緜山、太倉(現在の江蘇省蘇州市)の人。万曆二十九年の進士で翰林院編修を務める。父は万曆の首輔王錫爵。『明史』卷二二八に伝がある。

〔訳〕

その他、『七国』(『七国春秋平話』)、『両漢』(『両漢開國中興伝志』)、『両唐宋』(『残唐五代史演義伝』)および『南北宋志伝』のようなものは、弋陽の下手な芝居のように、銅鑼や太鼓を打ち鳴らすばかり、『三国志』を真似た低劣なものである。『西洋記』は王巷や金家の神が嘘をついて布施を乞うようなもので、『西遊記』を真似た愚かなものである。『続三国志』、『封神演義』などに至っては、病人のうわごとのようなもので、どこまでもでたらめで

子父、尊之至也。以天下養、養之至也。」とあるのを踏まえる。○忌諱 タブー。ここでは縁起の悪い言葉や不吉祥文字を指すか。明・馮夢龍『古今譚概』迂腐部第一「忌諱」に「宋文帝好忌諱、文書上有凶敗喪亡等字、悉避之。」とある。○河漢無極 銀河が果てもなく広いことから、話や言論が大きさで現実離れしているさまをいう(『莊子』逍遙遊)。但しここでは、『水滸伝』や『三国志』といった作品のスケールが果てもなく大きいことを指すか。梁・劉孝標「弁命論」(『文選』卷五四)に「夫聖人之言、顯而晦、微而婉、幽遠而難聞、河漢而不測。」とあり、宋・劉渙『三劉家集』に「予觀其詩、刻厲而思深、觀其文、河漢而無極。」とある。○伯喈 蔡邕(字は伯喈)のこと。ここでは蔡邕を主人公とする『琵琶記』を指す。

〔訳〕

宋の孝宗が天下の富を以て太上皇を奉養するに至ると、使いの者に命じて民間の奇事を尋ねさせ、日に一回ご進講させるようになった。これを説話人と言う。通俗演義のたぐいは、ここから盛んに行われるようになったのである。しかしその内容はほとんどが卑しく、差し障りのある字句も見られ、読んでも蠟を嚼むように無味乾燥なものであり、とりわけみるべきものでもなかった。元の施耐庵、羅貫中の二公は、この道に通じており、『水滸伝』『三国志』は事実と虚構を織り交ぜたスケールの大きなものとなった。論者はこの二集を『琵琶記』『西廂記』に配して四大書としたが、まことに壯観である。

⑪笑花主人「今古奇観序」(2)

迄於皇明、文治聿新、作者競爽。勿論廊廟鴻編、即稗官野史、卓然竄絶千古。説書一家、亦有崑門。然『金瓶』書麗、貽譏於誨淫、『西遊』、『西洋』、逞臆於画鬼。無閑風化、奚取連篇。墨憨齋增補『平妖』、窮工極變、不失本末、其技在『水滸』、『三国』之間。至所纂『喻世』、『警世』、『醒世』三言、極摹人情世態之歧、備写悲歡離合之致、可謂欽異拔新、洞心駭目。而曲終奏雅、歸於厚俗。即空觀主人壺矢代興、爰有『拍案驚奇』兩刻。頗費蒐獲、足供談塵。(明刻本『今古奇観』卷首)

〔語注〕

○崑門 専門のこと。○墨憨齋 馮夢龍(一五七四～一六四六)の書齋の名。三言の編者。馮夢龍については前稿の注を参照されたい。○即空觀主人 凌濛初の別号。凌濛初(一五八〇～一六四四)、字は玄房、号は初成。浙江烏程(現在の浙江省湖州市)の人。二拍の編者。○壺矢代興 「壺矢」は壺に矢を投げ入れるゲーム。『春秋左氏伝』昭公十二年に「晋侯以齐侯宴。中行穆子相、投壺。晋侯先、穆子曰、『有酒如淮、有肉如坻。寡君中此、為諸侯師。』中之。齐侯拳矢曰、『有酒如澗、有肉如陵。寡人中此、与君代興。』亦中之。」とあることから、「壺矢代興」は前のものについて次のものが興ることをいうか。

〔訳〕

情、不祖『三国』諸志之機詐。(明崇禎刊殘本『崑霄館評定新鐫出像通俗演義魏忠賢小説斥奸書』卷首)

(6) 底本は「事係章疏」に作るが、『古本小説集成』所収の影印本(北京大学図書館蔵本)は「半係章疏」に作る。ここでは影印本に従う。

〔語注〕

○崑霄館主人 崑霄館は陸雲龍の書肆名。陸雲龍、一五八七～? 字は雨侯、号は蛻庵、翠娛閣主人、浙江錢塘の人。小説の編纂や批評、出版に携わる。本書の編者「草莽臣」も陸雲龍の号。その他、『崑霄館評定通俗演義型世言』は、弟の陸人龍が編纂し、陸雲龍が評を付けたもの。○魏忠賢小説斥奸書 明末の宦官魏忠賢(一五六八～一六二七)の悪事を記した時事小説。現存する版本は崇禎元年に刊行された『崑霄館評定新鐫出像通俗演技魏忠賢小説斥奸書』の残本のみ。『金瓶梅』に言及される本記事は、凡例五条中の第四条。

〔訳〕一、この書はしばしば国家の問題に関わり、なかば君主への進言に係わるがゆえに、『水滸伝』が世のありさまを織りなすのには学ばず、『西遊記』が幻の世界を設けるのにも倣わず、『金瓶梅』の女性の情にも習わなければ、『三国志』諸志の狡猾さを手本ともしない。

(付記) 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「粗悪本」を中心とした中国通俗小説の出版および受容に関する研究」(研究課題番号:16K02589)による研究成果の一部である。

わが明王朝になると、文治は改まり、作者たちが筆を競った。朝廷によって編纂された巨編はもとより、稗官の野史であっても、筆力は高く千古を絶していた。講釈にも専門があつた。『金瓶梅』は華やかな書ではあるものの誨淫の譏りを受け、『西遊記』『西洋記』は鬼を描くのに想像の翼を広げすぎた。世を感化するという意味を持たなかつたならば、どうして篇を連ねることができたのだろうか(いずれも世を感化するものであつたからこそ、大部の書が完成しえたのだ)。墨憨齋(馮夢龍)が増補した『平妖伝』は、非常に巧みで変化に富んでおり、本末を失うことなく、その技巧は『水滸伝』『三国志』の中間に位置する。彼が編纂した『喻世明言』『警世通言』『醒世恒言』の三言に至っては、人情や世態の分かれ道をありのままに描写し、悲歡離合のありさまをつぶさに描き、異を重んじて新を引き出すもので、心を貫き目を驚かすものだと言えよう。しかも終わりは素晴らしく(因果応報で結ばれており)、世間の風化に帰着している。即空觀主人(凌濛初)はその後を承けて、『拍案驚奇』二刻を著した。苦勞の末に話が採集められただけあつて、話のネタになりうる。

⑫崑霄館主人「魏忠賢小説斥奸書凡例」

一、是書動閱政務、半係章疏^⑥、故不学『水滸』之組織世態、不効『西遊』之布置幻境、不習『金瓶梅』之閨